

1 単元名 後ろにスッ!気持ちよくクルッ!後方支持回転! (器械運動・鉄棒運動)

2 児童の変容

(1) 情意面 (男子1名)

- ・単元を進めていく中で、活動に対する意欲が高まり、自分から進んで運動に取り組む姿が増えた。タブレット端末で上手に逆上がりができる友達の動きと自分の動きを撮影し、それを見返り比べて動きの確認をしたことが有効であった。その結果、児童は正しい動きと、自分の動きとの違いに気付くことができ、具体的にどのように体を動かせばよいのかについて理解しやすくなったと考える。
- ・児童は、4年3組での交流および共同学習の中で、同じ場で練習をする児童の動きを真似たり、お互いに動画を取り合ったりすることで、技を成功させるための適切な練習方法について自分で考えることができるようになった。単元後半5時間目以降の「等質グループ」で取り組む時間は特に有効であった。
- ・準備や片付けの際には、担任から声をかけ促すことで、次に運ぶものは何かを考えて行動に移すことや、友達に積極的に声をかけ協力することが少しずつできるようになっていった。
- ・友達が練習する姿を見たことで、自分から繰り返し練習に取り組もうとする姿が増えた。よい動きをしている児童の姿を見たり、本児の動きに対して友達からアドバイスをもらったりすることで、みんなと同じように逆上がりができるようになりたいという思いが芽生えたと考える。
- ・本児は、友達に補助してもらおうと逆上がりができるが、初めは、友達に補助を頼むことができなかった。しかし、担任の促しにより友達に補助を頼めるようになり、次第に本児が頼まなくても友達が自ら補助してくれるようになった。初めはお礼が言えなかったが、担任からの促しによって「ありがとう。」が言えるようになり、単元の終わりには自分からお礼を言うことや、友達の補助にも積極的に加わることができるようになった。
- ・できなかった動きができるようになってくると「できた!」と、喜びを教師に伝える姿が見られた。タブレット端末に記録してある、前時までの姿を振り返り、変化を確認することで、達成感を味わうことができ、自信をもって主体的に運動に取り組むことにつながったと考える。

(2) 技能面

- ・6組で事前に、上手に逆上がりができる児童の動画を用いて、逆上がり成功するためのポイントについて箇条書きにして整理する活動をしたことで、授業の始めに書く学習カードへの記入がスムーズになった。目指す姿や、そのためにするべきポイントが整理されたためと考える。
- ・腕支持が苦手な「ブリッジじゃんけん」ができなかったが、バランスボールに支えられながら片手で体を支えるための力の入れ方を体得し、4時間目以降できるようになった。
- ・「反りくぐり」では、始めは動きがぎこちなかったが、グループで素早く動ける友達の動きを見て何度か練習していくうちに、肩関節の角度を広げて後ろを見る感覚をつかみ、5時間目以降単元の終わりの頃には素早い動きができるようになった。
- ・本児が目標としていた逆上がりでは、腕の引き付けや踏み切り足を強く蹴り上げる、手首を返すこと等を意識し、「蹴る」「曲げる」「おへそ(見る)」「手首(返す)」を合言葉に、足を振り上げる部分を友達に補助してもらおうと、回ることができるようになった。
- ・授業時間以外でも、休み時間などを使って「ダンゴムシ」の練習をした。始めは1秒ももたなかったが、練習を繰り返すと「1, 2」と数える間くらいはぶら下がるようになった。

(3) 思考面

- ・友達の動きを見て、自分の動きの参考にする姿が見られた。教師が率先して児童の姿を称賛したり、友達の動きのよさを伝えていったりしたことで、自分もできるようになりたいという思いを強くもち、課題意識をもって練習に取り組めたと考える。
- ・毎時間の目標を一緒に確認する際に、逆上がりが一人でできるポイントを箇条書きにしたヒントカードを用いて、今日は特にどのポイントに気を付けるのかを意識させてから繰り返し取り組んだ。やるべきことが明確になることで、ポイントを絞って練習に取り組むことができた。
- ・学習に取り組む前は、上手に行うための技能ポイントを尋ねても答えることができなかった（「逆上がりができるか不安。勢いよくやる」とだけ回答）。学習後は、合言葉でもあった「勢いよく蹴る」「腕を曲げる」「おへそを見る」「手首を返す」と回答しており、本児なりに技能ポイントを答えることができるようになった。

3 成果と課題

特別支援教育のめざす姿

- 1 教師の支援を受けながら一人で運動できる児童
- 2 自分で考えたり、気付いたりしたことを仲間や教師に伝えることができる児童

【成果】

- ・技のポイントを見付けさせるために、友達のよい動きを何度も見せることで、体の動かし方や、目線をどこに向ければよいのかに意識を向けることができた。
- ・担任の促しにより、補助やタブレット端末での動画撮影などを友達に頼む言葉掛けを行うようになり、学習の終わりには自分からグループの友達の補助を行うなど積極的に仲間と関わることもできた。
- ・タブレット端末で自分の動きを録画し、目指す動きを達成できている友達との動きの違いに気付かせる活動を取り入れたことで、目指す動きと実際の動きの違いに気づき、技法ポイントを意識しながら練習に取り組むことができた。
- ・毎時間のめあてを具体的に確認させるために、ポイントを箇条書きにしたヒントカードを用意したことは有効であった。どのような練習が効果的かを助言し、目的をもって課題解決学習に取り組ませたことで、児童が技能向上のために思考することができた。
- ・自分の実態を把握しやすくするために、タブレット端末で撮影した自分の試技を見ることで、できている部分と改善が必要な部分を客観的にとらえることができた。

【課題】

- ・単元の後半に等質グループで練習した際は、友達の補助を積極的に行うようになり成長が見られたが、友達にアドバイスをしたり、友達と技を見せ合ったりすることは難しかった。
- ・友達や自分の頑張りを具体的に褒められるように、伝え方の例を、必要に応じて提示したり、側で褒め方の手本を見せたりしても、本児が進んで友達のよいところを褒めるのは難しかった。
- ・自分の実態を把握しやすくするためにタブレット端末を用いる際、友達に動画を撮ってもらうことはできたが、撮った動画を見合ってよりよくなるようにアドバイスをし合うことは難しかった。